



## コンサート乗り打ちツアー

今、フランス南の広大な畑や緑を目の前に、ひたすら高速道路を突き進むツアーバスに揺られながら、このエッセイを書いています。今回の仕事は、イギリスで最近人気を集めている若手詩人/ラッパー、ケイト・テンペスト氏のコンサート照明オペレーターです。このコンサートの照明デザイナーである、マイルズ・ウェイバー氏は昨年からのツアーでオペもされていたのですが、この夏から他のアーティストのコンサートが入ったので、代わりにツアーオペができる人を探されていたのです。ヨーロッパ（この夏はイギリス、ドイツ、フランス、ポルトガル、オランダ）のミュージックフェスティバルを回る、乗り打ちツアーに参加させていただいています。

乗り打ちツアーと言いましても、週に何日かは家に帰れるので、半乗り打ちと言ったほうが良いかもしれませんね。

ドラマー、キーボード、シークエンスプレイヤー率いる彼女のバンドは、長年一緒に活動してきた仲間だそうで、お互い家族のような存在になっているようです。ツアー中も、バンドメンバーたちのオープンさと互いの信頼感が伺える、とても暖かいバンドメンバーです。ツアーマネージャーやサウンドエンジニアたちも含める、音楽界の人たちに囲まれて



バンドメンバー、クルーとその仲間



フランスのCABARETVERTフェスティバルにて

ミュージックフェスティバルをツアーすることは、演劇のツアーとは、全く違った雰囲気、とても新鮮です。それぞれのフェスティバルで、使ったことのない機材や、新しい人との出会いがあったり、刺激的な毎日が続いています。普段、あまり関わりがない音楽ツアーの仕事に、偶然関わらせていただき、すっかり舞い上がっています！

各フェスティバルの機材の種類はスケールによって異なりますが、ムービングスポットタイプだと、Clay Paky - Alpha spot QWO 800、Robe - BMFL Blade、spot 1200、Robin 600E、Martin - Mac Viper Performance Spot、Mac Quantum profile、Mac 250 Entourなどで、ウォッシュタイプだと、Martin - Mac Aura、MAC Quantum、GLP - Impression X4、Clay Paky - A.LEDA B-EYE K20、Vari Lite - VL5、ビームタイプは、Robe - Robin Pointe（よく使われています）、Elation Platinum Beam 5R、Mac 250 Beamなどで、ストロボは、ほとんどの会場がMartin - Atomic 3000で、たまにAtomic 3000 LEDやSGM - X5も混ざっているときがあります。

我々の持ち込み機材はとてもシンプルで、7 x Robin CycFXのみ。フェスティバルの吊り込みをマイルズ氏のデザイン（持ち込みの卓）に素早く取り込めるように、彼のデザインを徹底的に把握し、それぞれのフェスティバルで、適切なフィクスチャーを当てはめなければなりません。ツアーのはじめの頃は、ツアー用のコンパクト卓、Avolite Quartzを家に持ち帰り、ビジュアライザー Captureにつなげては、何度も何度も曲を繰り返し聴きながら、きっかけの練習をし、それ

ぞれのキューを分析しました。前にもお話しましたが、Avolite卓はエフェクトに強いという印象があります。エフェクトは図でわかりやすく、いくつものレイヤーを重ねても、修正しやすくなっているからです。しかし、トラッキングの仕組みが他の卓と少

し違い（キューをブロックしても、ブロックキューをとり越してトラッキングできるなど）、違和感を感じるのは私だけでしょうか？

マイルズ氏が私にこの仕事を引き継ぐ前に、何人かの照明エンジニアも、このオペを引き継いだことがあるそうです。前のショーファイル（基礎ショーファイル）を開くと、所々に、パレットでアサインされなければいけないはずのムービングのバリューが、ハードバリューで打ち込まれていたり、いくつか手直しが必要などありました。フェスティバルではおなじみのことだと思いますが、短い転換の間に、いかに完成度を上げられるかが、この仕事の一番の腕の見せ所だと思います。事前に卓上で修正できる場所は前もってしておかないと、あっという間に公演ははじまってしまうので、1分たりとも無駄にできない時間との勝負です。実際、いくら事前準備をしても、会場に到着してからわかることもあります。パッチは事前に送られてきても、変更があったり、稀に、フィクスチャーパーソナリティーが世に出回ってない機材（カスタムメイド機材等）を使わなければならないときは、会場がUSBでパーソナリティーをくれたり、自分で1から作らなければいけないときもあります。

フェスティバル側のエンジニアは、大半とても歓迎してくれ、協力的に手伝ってくれます。照明エンジニア同士は、たとえ言葉が通じないことがあっても、お互いに言いたいことは大体わかるというのは、嬉しいことです。きっと皆さんもそのように感じたことがあるのではないのでしょうか。どこの国に行っても、「よい公演にしたい！」というみんなの思いは同じなのだと感じます。公演のエンディングで、観衆の大声援とバンドメンバーの満点の笑みを見届ける瞬間は、何度やっても感動的です。

公演後のバラシの後、フェスティバルを数時間楽しみ、バスに乗り込んで次の日の会場へ向かう間に一眠り。眠りにつく前に、低い天井を見つめながら、1日の反省点をぶつぶつ唱え、「とにかく今日は素敵なお日だった。ありがとう。明日も頑張ろう！」と思うのでした。PS: 「日本の皆様、是非、Fuji Rockに呼んでください！」ケイト・テンペスト